

理事長所信

公益社団法人 下館青年会議所

2018年度理事長 齋藤 聡

青春とは人生のある期間を言うのではなく 心の様相を言うのだ
年を重ねただけで人は老いない 理想を失う時に初めて老いがくる
人は信念と共に若く 疑惑と共に老ゆる
人は自信と共に若く 恐怖と共に老ゆる
希望ある限り若く 失望と共に老い朽ちる

《はじめに》

終戦直後、「新日本の再建は我々青年の仕事である」と掲げ青年会議所が日本に誕生してから69年、この下館では今年で40年が経ちます。数多の先輩方が明るい豊かな社会の実現に向け、現役時代はもちろん、ご卒業されてからもJC魂を胸にそれぞれが住み暮らす地域社会、または日本、そして世界と様々なステージで、きっとこの詩にあるような情熱を燃やしご活躍されてきたことと存じます。本年、理事長職を拝命し、その歴史を改めて振り返らせていただき、大きな敬意と感謝の念に堪えません。

青年会議所では活動期間について40歳までという年齢制限を設けております。これは常に組織を若々しく保ち、果敢な行動力の源泉であり、また全ての役職を単年度制とすることで、より多くの会員が豊富な実践経験を積むことができるという大きな特性があります。しかしその分会員の入れ替わりは当然ながら毎年行われ、公益社団法人下館青年会議所（以下、下館JC）で見えますと、昨年度の期首会員70名のうち、入会5年以内の会員が7割近くを占めており、在籍10年以上ともなると1割程度であるのが現状です。

愛する地域の未来のためにこの運動を継続していくには、新しい会員を増やし続けていくことは言わずもがなですが、極端なことをいえば年齢が若いだけでは組織として本来の目的を達成することはできません。青年会議所とはなぜ存在し、何を目的に、何を目指し運動を展開しているのか、単に事業や組織運営だけではなく、これまで連綿と受け継がれてきた志、信念、情熱、想いを次代につなげていくことこそが、いま現役である我々の最も重要な役割のひとつであると考えます。

《創立40周年を迎えて》

下館J Cは本年度をもって創立40周年を迎えます。自分の親が下館J C卒業生である会員もあり、そのことひとつをとってみても40年という年月を肌で感じます。これまで歴史を築き上げてこられた先輩方はもちろん、行政関係者や各種他団体、そして全国各地青年会議所の同志など、数え上げたらきりがなほたくさんの方々のお世話になってきたことはいうまでもなく、心より御礼申し上げます。

そんな節目となる本年は創始の精神を今一度振り返り、これまでの歴史に鑑みて、いま我々が成すべきこと、未来に向けて発信すべきことを認識し、志気を高め実行して行くことが必要であると考えます。確かな決意をもって創立40周年記念式典を開催させていただき、さらに地域の皆様に感謝のかたちとして、下館J Cにとっても今後の糧となるような公益性の高い記念事業をお届けすることをお約束いたします。

また現役会員にとっては、限られたJ C活動のなかで10年に一度しかない貴重な機会です。我々自身も一年間大いに祝い楽しみましょう。

《会員拡大とはJ C運動である》

上記でも述べさせていただきましたが、会員拡大は組織存続のために必須であり、青年会議所が誕生してから現在まで、途切れることなく続いているJ C運動であります。

To provide development opportunities that empower young people to create positive change

(より良い変化をもたらす力を青年に与えるために発展・成長の機会を提供すること)

2008年度に世界会議で採択されたJ C I ミッションにはこう記されています。会員を増やすことは事業費を確保し、より力強い運動を発信していくために必要です。加えてまちづくりが人の力で行っていくものであるならば、多くの青年に成長の機会を提供するためにも、J Cに入会していただくことはその素晴らしい手段のひとつであり、まさに会員拡大はJ Cの使命であるといえます。そして一人でも多くの仲間を迎え入れ、互いに切磋琢磨を重ね真のJ A Y C E Eを育成するまでが拡大活動であると認識し、委員会の枠を超え全員がこの使命に取り組んでまいりましょう。

《青年による愛と勇気と情熱溢れる公益事業》

下館J Cでは、地域の課題と向き合う「まちづくり」、未来を担う子どもたちに対する「青少年健全育成」、個人個人の成長を促す「ひとづくり」という3つのカテゴリーで公益事業を展開しております。下館J C定款第3条にもある通り、それらの運動を通して地域社会の発展に寄与することが当会の目的であります。

2013年12月3日に公益社団法人に移行してから4年が経ち、以前から公益性の

高い事業を行っていた下館 J C ではありますが、その意識は確実により強いものになりました。全体収入の 50% を公益事業に当てるという規則があり、自然の流れといえそうですが、例えば 2016 年度に開催された公益事業では、J C 会員以外の参加者数は一年間で約 1,300 名を数えました。全て申し込み制の参加であることを考えれば、決して少なくはない数であると思えます。しかしながら、ただ事業の数を増やし参加者の数だけを追っているばかりでは、必ずしも効果的であるとはいえません。J C としての特性を活かしたアプローチで、質の高い愛と勇気と情熱溢れる公益事業を展開していくことが必要です。

2018 年度公益社団法人日本青年会議所、池田会頭の所信では、我々は政治を動かして社会を変える“政動社変”の精神を身に纏い、今考えられる最良の仮説をたて、スピード感をもって P D C A を繰り返し、仮に予期せぬ結果であっても諦めず試行錯誤を続け、最良であると思える解決方法が見つければ、それを仕組みとして組織化していくことが大切である、と述べておられます。下館 J C でも、この行動指針に沿って地域の諸問題に向き合っていきたいと考えます。

《力強く協働のまちづくりを推し進めよう》

「このまちに住んでいて本当に良かった」と感じている市民の割合とはどの程度のものなのでしょうか。実質的な生活の質の向上もさることながら、まちづくりの目指すところは、やはりそう思っている市民がひとりでも多くなることではないかと思えます。そのためには我々も含めた市民一人ひとりが地域の抱える問題に対して当事者意識を持ち、主体的にまちづくりに取り組むことが重要なのではないかと考えます。2009 年から 7 年間筑西市と共催させていただいた市民討議会では、声なき声を行政に届けるというコンセプトで、無作為抽出をさせていただいた市民の方々に地域の課題に対して討議を行っていただき、その報告書を直接市長に提出してまいりました。そこから派生した検証事業や若者に対象を絞った討議会など、かたちを少しずつ変えながらも、市民と行政がともに協力し合う、いわゆる協働のまちづくりを推進してきました。本年もこの流れを継続し、実行に移してまいりたいと考えております。

また地域の課題として真っ先に思い浮かぶのは、やはり市の人口減少問題であります。ここ数年で見れば自然減と社会減を合わせると筑西市では約 1,000 人、桜川市では約 600 人の人口が毎年減少しており、ともに茨城県のなかでも高い減少率となっております。両市のまち・ひと・しごと創生総合戦略のなかでも、企業誘致などによる雇用の創出や中心市街地の活性化、教育、医療の充実などその対策が急務であることが記されております。まちづくりはひとづくりとも言われ、繰り返しになりますが、そこに住み暮らす市民が主体性を持って取り組むことが重要であると考えます。これまで発信してきた数々の事業のなかで培われてきた経験に新たな感性を加え、いま取り組む必要がある課題と向き合い、下館 J C が行うべき 2018 年度のまちづくり事業を展開してま

います。

《地域のたからを育もう》

未来を担う人材を育成することは、いつの時代でも疎かにはできず、優先して取り組むべきことでもあります。特に子どもたちの教育に関していえば、国の未来につながる最重要項目であることは間違いありません。昨年日本J Cでも教育再生を基本理念のひとつとして運動を展開してまいりました。下館J Cとしても長年に渡り青少年の健全育成を目的に、家庭や学校でのそれとは一線を画した、J Cならではの体験事業を開催してまいりました。特に夏のキャンプ事業では募集人数を大幅に上回る応募が続いており、毎回100名を超える子どもたちを預かることは、我々会員にとっても大きな責任と共に、多くの学びを与えてくれる事業となっております。その他、こちらも18年目を向かえる夏祭り子ども神輿体験事業は、地域最大の伝統行事に実際に子ども神輿を担いで参加し、その町内の方々などとも触れ合うとても貴重な体験を得ることができる事業であり、本年も継続しての開催を計画しています。

私は生まれてから高校までをこの筑西市で過ごし、卒業してから8年間東京に住んでおりました。全国各地の出身者と交友を深めましたが、その際に多くの場面で自分の故郷に関することが話題に上がります。自分が生まれ育ったまちのことでも、いざどんなところなのか、どんな魅力があるのかと聞かれても、うまく伝えられなかったことを思い出します。地域の未来を担う子どもたちには、その地域の魅力を体験することで知ってもらい、上記二つの企画を含めて郷土に対する愛と誇りを育む一助となるような事業を贈らせていただきたいと思います。

また、このまちに暮らし仕事をしている我々J C会員も含む責任世代ともいうべき青年世代も、地域の今を担うたからであり、こちらに対しても自立した社会人として更なるスキルアップを目指す研修事業を開催してまいります。

人は財（たから）であり、磨けば磨くほどに光り輝いていけるものだと信じ、明るくこころ豊かな人材育成を目指し、自らも含め研鑽を重ねてまいりましょう。

《J Cの魅力を発信し続けファンを増やそう》

前項で大人気と述べたキャンプ事業ではありますが、昨年参加していただいた子どもの保護者であった知人と話をしていた際に、人気があつて早く応募したほうが良いとは聞いていたのだけれど、J Cが開催している事業だとは知らなかったよ、と言われました。他にも例を挙げれば2016年に2日間で500名近い登録をいただいたハロウィンフェスティバルや、2017年に開催した若者限定のバンドコンテストなど、内容としてはとても満足したものとなり、我々にとっても参加者にとっても実りある事業ではなかったか感じております。しかし同時開催していた既存のイベントの存在もあつてのことではありますが、「下館J Cファン」を増やせたかと問われれば、疑問符が付い

てしまうのが率直な思いです。それはとても悔しく反省すべきことでもあり、今後検討していかなければならないものであると考えております。地域に誇れる魅力ある事業を開催していても、認知されていなければ効果は半減してしまうこともあります。逆に下館 J C というブランド力を高め信頼を得れば、例えば会員拡大活動においてもその影響力は絶大になるでしょうし、それに限らずあらゆる面で好影響を及ぼすことは容易に想像できます。SNS が急速に発達し、情報発信の方法とスピードが目まぐるしく加速していく現代において、より効率的で効果的な広報活動を模索し、下館 J C の魅力を存分に発信し続け、たくさんの「下館 J C ファン」を獲得しましょう。

《J C という組織 向上心があれば学びは無限》

私が J C に入会をさせていただいてから 10 年以上が過ぎました。沢山の出会いや学びをいただき、この組織は本当に多様な舞台が用意されていると、活動を続ければ続けるほどに実感しています。事業そのものでの学びはもちろん、各種会議や委員会を運営しそれらを作り上げるプロセスに携ること、またその経験は下館 J C としてだけではなく出向という仕組みのなかでも養うことができます。事業を行うなかでは必然と J C 会員ではない方々との関わり合いも多くあり、あるいは組織そのものを運営していくうえで必要となる予算の管理や諸々の事務作業に広報活動、自分たちが主催ではない対外事業への参加、時には自然災害に対してのボランティア活動など様々な場面のなかで、心の持ちようひとつで学べることは無限にあるのだと感じます。

J C は私のすべてではない。しかし、J C なしに今の私は存在しない。こうおっしゃっていた先輩がおりました。人一倍の J C 活動と平行してビジネスでも大成功された先輩です。私たちは J C だけで生活をしているわけではなく、当然各自に仕事やプライベートがあります。その限りある時間をこの活動に割いているのであるからこそ、そこでの学びは J C だけに特化したものではなく、ひとりの人間として成長するためのものでなくてはなりません。向上心を持って、積極的にことにあたるとは、なにも J C に限ったことではなく、大げさかもしれませんが充実した人生を送るうえでの大切な精神ではないかと思っております。しかし手を伸ばせばチャンスがたくさん掴める J C とはいえ、既述の通り活動できる期間には制限があります。少しの無理もせずに成長はありえません。成長とは背伸びの繰り返しです。自分と J C の可能性を信じ、限られた尊い時間のなかで共に貪欲に挑戦してまいりましょう。

《結びに》

何としても二階にあがりたい、どうしても二階にあがろう

この熱意がハシゴを思いつかせ、階段を作りあげる

上がっても上がらなくてもと考えている人の頭からハシゴは生まれない

時代は常に変化を続けていきます。歴史を知ることは大切であり、無視できるものではありません。ただ過去の成功例だけで乗り切れることばかりでないことも事実であります。過去から学び未来を考え率先して行動すればこそ、迷い、悩み、衝突し、時には立ち止まってしまうこともあるでしょう。しかし人は大小様々な困難に直面したときに始めてその人間の本質がさらけ出されるのではないのでしょうか。そのまま立ち止まり背を向けてしまうのか、それとも正面から立ち向かうのか、あるいはまた別の道を探すのか、己の判断に責任を持ち、その決断と経験を積み重ねることで自己を成長させ、変化する時代に対応できる強い自分を形成していくのだと思います。

お天道様が見ているよ、と子どもの頃に言われたことがあります。誰も見ていないからといってズルしちゃだめだよ、というような意味で当時は言われたのだと覚えております。ただこの教えは大人になった今でも大切な考え方であるように感じています。特に志高くあるべき J A Y C E E にとっては、無くてはならない心構えであると思えてなりません。

組織は個人の力を最大限発揮できるものであるべきであり、また個人も組織力を高めるための存在であることが望ましいのではないかと考えます。一年間、組織の代表になる者として一人ひとりが輝ける土壌を整え、それぞれが常に真摯な姿勢で己を律し、自利と利他の精神を兼ね備え、英知と勇気と情熱をもって困難に立ち向かっていくことで、下館 J C は躍動し続け、明るい豊かな社会の実現へとつながるのだと信じております。動いて転んでも立ち上がり、青年らしく本気でイマを駆け抜けましょう。

日の光を借りて照る 大いなる月たらんよりは
自ら光を放つ 小さな灯火たれ